

# The New Dare To Discipline

## 第一章

### 子どもの挑戦を受けて立つ

本書は、子どもと子どもを愛する人々のために書きました。初版が出たのは、私が南カリフォルニア医大の小児科学教授だった一九七〇年代初めです。うちの子どもたちがまだ就学前だったため、子育てについて助言をするのは危ういことでした。試合が始まったばかりなのにもう勝ったようなことを言うコーチのようなものです。それでも、学者としても臨床の経験からも、子どもをどう育てるべきか、子どもが親から何を必要としているかについて、私には固い信念がありました。

「思い切ってしつければしょう」は、初版以来三十年以上にわたり、二百万部以上読まれました。この間に、視野も広がり、おそらくは洞察も鋭くさせられたと思います。何千という家族に関わり、子育てに関する大勢の権威者や同僚の見解を学びました。一人の子は、思春期をすぎ、今は自分たちの家庭を築いています。今こうして時計の針を戻し、最初に取り組んだテーマに戻ることは、すばらしい特権です。

子育てや子どもの成長に関する私の見解が、この間に大きく変わったと考える方もあるでしょうが、そんなことはありません。確かに、初版の頃とは社会背景は劇的に変わりました。そのため、改定増補することになったのです。六十年代後半から七十年代初めにかけて吹き荒れた学生運動の嵐はやみ、ウッドストックやベトナム戦争は遠い記憶となり、大学のキャンパスは平静に戻り、反体制的ではなくなりました。

しかし、子どもは変わりません。これからも変わらないでしょう。家族の創造者による良き子育ての原則は、永遠だとますます確信しています。聖書の靈感を受けた原則は、世代から世代へと受け継がれ、私たちの祖先の時代と変わらず二十一世紀も有効です。不幸なことに、近ごろの親の多くは、これら伝統的な教えを聞いたこともなく、家庭でこれからする仕事について手がかりを持っていません。

三歳の反抗的な娘サンディーの扱いに困り果て、助けを求めて来た母親のことが忘れられません。サンディーは、意志の強さでは母親勝りで、我がままのし放題となってしまうことが親にも分かりました。

相談に来た前日の午後、典型的なでき事がありました。ニコルス夫人（仮名）は、娘に昼寝をさせるつもりでしたが、おとなしくベッドにいそまないことはわかっていました。サンディーは、自分のしたくないことはしない子で、昼寝は午後のスケジュールに入っていません。

しかしサンディーはこの時、自分のしたいようにするより、むしろ母親を苦しめることに興味を持ちました。叫び声をあげ始め、近所中をうるたえさせるような大声でわめき、ニコルス夫人の神経をすり減らしました。それから涙声で、お水を一杯持つてきてとか、色々だだをこねました。

ニコルス夫人は、最初は言いなりになりませんでした。が、わめき声が再びピークに達すると、降参しました。コップの水を持ってくると、だだっ子はそれを押し退け、ママがさつさと持ってきてくれなかったからいらぬ、と言いました。夫人は、コップを持ってしばらく飲ませようとしたが、それから、もし五つ数えるうちに飲まないなら、台所に戻すと告げました。

サンディーは、意を決して母親が数えるあいだ待ちました。「三つ：四つ：五つ！」

ニコルス夫人がコップをつかんで台所へ向かうと、サンディーは飲みたいと叫びました。サンディーはこうして、ママを困らせヨーヨーのように行き来させるゲームを飽きるまで続けたのです。

ニコルス夫人も娘も、役立たずで筋の通らない育児法の犠牲者の一人です。育児の手引書は、長いことこういう考え方に支配されてきました。子どもというものはいつかは理性と忍耐に応えるものだから、厳しくしつける必要などないと書かれたものを母親は読んでいました。子どもの反抗には敵意を発散させる効果があるので、むしろ反抗を励ますよう言われました。専門家たちの勧め通り子どもとぶつかったとき、子どもの気持ちを代弁しようとした。

「お水が飲みたかったのに、ママが持って来るのが遅すぎたから怒ってるのよね」

「ママがお水を台所に戻しに行っちゃ、いやなのね」

「お昼寝をさせようとするから、ママがきらいなのね」

さらに彼女は、親子の衝突は、誤解か見解の相違にすぎないと受け止めるようにも言われていました。

残念ながら、ニコルス夫人も助言者たちも、間違っています。母娘の争いは、単なる見解の相違ではありません。娘は母親に挑戦し、からかい、反抗していたのです。この鼻をつき合わせた対決は、心と心の対話では解決しません。なぜなら、本当の問題は、お水とかお昼寝とか、具体的状況とは関係ないからです。この実例、そして数知れない親子の衝突の陰にある本当の意味は、サンデーは厚かましくも母の権威を拒んだということです。ニコルス夫人の対応の仕方次第で、将来の親子関係、特に思春期の関係がが決まります。

きびしく抑圧的で、心ないしつけの危険については、多くの書物が書かれており、それらの警告には価値があり、耳を傾けるべきものがあります。しかし、親の指導を放棄することを正当化するために、抑圧的なしつけの悪影響がくり返し語られました。愚かなことです。意地っ張りな子が、小さなこぶしを握りしめ、ふてぶてしく両親に挑戦するときがあります。これは、よく言われるような欲求不満や内なる敵意に動かされているのではなく、むしろ、限界はどこにあり、親は従わせる気があるかを知りたいだけです。

多くの善意の専門家は、「寛容さ」を強調してきましたが、子どもの反抗に対しては何の解決も与えませんでした。親が子を理解することの大切さを彼らは強調しました。それには賛成ですが、子どもにも親について学ばなければならないことがあることを、教える必要があります。

ニコルス夫人も、同時代のすべての親も、どのように限界を定め、反抗的な態度に対してはどうすべきかを知る必要があります。このしつけは、愛情と思いやりという枠組の中でされなければなりません。これは、しつけと愛情が相容れないと考える親にとって、しばしば困難です。本書は、ある意味で、健康で礼儀をわきまえた幸せな子を育てるといふポイントに焦点をあてています。

「しつけ」は、親子のぶつかりあいだけに限られた言葉ではなく、本書でもそういう意味で用いられます。子どもは、自己訓練と責任ある行動も教わる必要があります。人生の義務と責任とを、どのように果たすかを学ぶ手助けがいられます。自製の技術を身につけなければなりません。学校や仲間たちから与えられる責任や、後には大人としての責任を果たすための、人間としての強さが必要です。

こうした性質は教えられないと、信じる人がいます。私たちにできることは、幼いときに、せいぜいできるだけ楽な道に歩ませ、障害物をどけてやることだと。この自由放任主義哲

学のリーダーたちは、もし子どもが望むなら学校では落第させ、自分の部屋を正真正銘の「豚小屋」状態にし、飼犬はおなかを空かせたままでもいいと言っています。

私はそういう考えを受け入れませんし、そのための十分な反証を集めました。子どもは、純粋な愛の雰囲気の中で、理にかなった一貫したしつけをされる時、のびのびと育ちます。薬物乱用、不道徳、性感感染症、野蛮な行為、暴力が蔓延する時代にあつて私たちが大切に思う態度を持つ子どもを育てるためには、成り行きに任せただけではだめです。自由放任は、子育てとして失敗ただけでなく、試した人々にはとんだ災難でした。

正しく用いれば、愛あるしつけは効果があります。親子が互いを大切にす思いから来るもので、やさしい気持ちを起こさせます。互いに愛し信頼すべき家族が離ればなれになるところに、橋をかけます。愛あるしつけによって、私たちの信じる神を子どもたちに伝えることができます。これによって先生方は、教室でなすべき職務を果たせます。子どもたちも、人を敬うことを覚え、責任ある建設的な市民として生きられるようになります。

当然ながら、この特効薬には値札がついています。つまり、勇氣、一貫性、信念、勤勉さ、熱心な努力という代価です。一言で言えば、混じりけのない愛情で、「思い切つてしつけ」ることです。これから、そのための具体的な方法を考えましょう。